

The Affair of the Circus Queen
1940
by CLIFFORD KNIGHT

目次

〈サーカス・クイーン号〉事件

5

訳者あとがき 322

解説 横井 司 325

主要登場人物

- カービー・マーティン……………サーカスの団長
コートニー・ラスク……………サーカスの広報係。語り手
ドリス・マーティン……………カービー・マーティンの姪
スーザン・ポーター……………ドリス・マーティンのいとこ
ハントン・ロジャーズ……………大学教授
ヘイル・キングスリー……………ドリスの幼馴染み
ヴァンス・サーストン……………サーカスの統括マネジャー
ウッズ……………〈サーカス・クイーン号〉の船長
ポール・ストラットン……………道化師
エドウィーナ・ナイルズ……………曲芸師
ジャック・フォーリー……………曲芸師
ジョン・トーベット……………ゴリラの飼育係
イン・ユエン・シン……………〈サーカス・クイーン号〉のオーナー。中国人

〈サーカス・クイーン号〉事件

叔母おばのレティシアへ

本書の登場人物はすべてフィクションであり、
実在の人物とは一切関係のないことを付記する。

第一章

日が暮れる頃、船長が大きな手の上に黒表紙の本を開き、厳かな澄み切った声で死者への祈りを捧げ、その後、我らが団長の亡骸が海の中へと葬られた。帆布で覆われた塊が水面を打ち、熟練のダイバーが飛びこんだみたいにに小さな飛沫しぶきがあがり、手品か何かのトリックを使って死者が人間としての最後の機能を果たそうとしているような奇妙な余韻がそこに残った。やがて深海の水が亡骸を覆い、さざ波がゆつくりと滑らかに広がっていった。船長は騒々しい咳払いをして、まるで幽霊でも見たように不可解な表情で甲板を見つめ、船室へ歩み去っていった。

この簡潔かつ神々しい儀式が終わると、漠然としたやましさを抱えながら我々は甲板から三々五々と散ってゆき、〈サーカス・クイーン号〉は沈んだ太陽が残した火花のような余波に錆びついた鼻先を向け、再び針路を目指した。老婆が謎に満ちた一日の活動を終えてヨタヨタと家路に向かうかのようにに、穏やかな黒い水面を一定の速度で動きだした。故人にとつてはこれでよかつたのだと、誰もが心の中で呟いていた。いづれにせよ、我々は今、熱帯地方にいるわけで、五日後に上陸するマニラまで遺体を保管するのは不可能だった。

甲板の下手では、数頭の象が船の動きに合わせてゆつくりと揺れていた。絶えず落ち着きなく動いている鼻は奇妙な指のごとく、決して見つけられない何かを永遠に探し求め、それに触れようとして

伸びているかのようだ。オールド・ベツシーは埋葬の祈りのあいだ甲高い鳴き声をあげ、それによつて船長は言葉をさえぎられ、落ち着かなげに甲板の方へ目を向けた。年老いた象は、深い海に沈んでいく自分の飼い主の亡骸に別れの言葉を述べているようだった。しかし、柵のところでは何が行われているか、檻の中からは見えず、象は飼い主の埋葬を知る由もなかったはずで、この行動は説明のつかないことだった。その鳴き声は、まるで冷たい指が背骨に這いあがるような感触をもたらした。それに答えるように甲板の下のライオンの檻から唸り声が聞こえるのではないかと耳を澄ましたが、何も起こらなかった。

象は足に鎖を巻きつけられ、静かにゆっくり体を揺すっている。くすんだ灰色の体に埋まっている小さな瞳は飼育係の動きを追いながらも、群れの中で密かに警戒の色を発していた。象と団長のあいだには二十五年以上にも及ぶ友情の絆があった。カービー・マーティンがまだ若く、ウイスコンシン州にいたとき、立ちいかなくなったサーカスから象を買取り、生涯に渡る冒険へと乗りだしたのだ。甲板の自分の住み処^かから、オールド・ベツシーがその日に起こった悲劇や日没時の陰鬱な別れなどを決して目にするとはなかったのに、なぜかすべてわかっているかのようだった。永遠の墓場となる海に沈む長年の友に向かって高らかな声をあげた。

「何が起こっているか、あいつは知ってるみたいですね、ミスター・ラスク？」わたしの考えを横にいた男がそのまま口にした。

「ああ、ジャック」

あつと言う間に深まる黄昏の中、我々は静かに象を見つめていた。サーカスの団員たちがやって来て甲板の下手に目をやり、そして再び去っていった。その中に三人の曲芸師がいた。道化師の一人で

あるポール・ストラットンと空中曲芸師の女性エドウィーナ・ナイルズも。オールド・ベッシーの所有者は飼育していた長い年月、毎夜、象に声をかけるのを欠かしたことがなかった。ザラザラとした体を軽く叩き、大きくはためく耳に向かって言葉をかけていたのだと。オールド・ベッシーはカービー・マーティンの運命の礎いしづえだった。ベッシーを中心にサーカスを築いていったのだ。

「象はこれからどうなるのでしょうか？ 我々は？ —— 僕は？ マニラに停泊するのでしょうか、ミスター・ラスク？」

「そう先を急がない方がいいだろう、ジャック」わたしは若者に忠告した。太陽が沈み、深まりゆく黄昏の中に若者は立ちすくみ、真剣な顔でこちらを見つめている。彼のラスト・ネームはフォーリーと言ひ、華麗なる綱渡りを披露する曲芸師だ。カービー・マーティンは彼がアジア諸国の巡業で成功をおさめると信じていた。「君はこの仕事についてまだ日が浅い」

「カービー・マーティン・サーカスに参加する初めての機会だったのに。でも、これから——」

「ああ、わかつてる」

「マニラでショーはおこなわれるのでしょうか？」

「そう思うよ。興行の予定は入っている。でも、まだ何一つ決まってははいない。この状況について話し合いますら行われていない。サーカスをどこに設営するのかさえ誰も知らないんだ——巡業を続けるかどうか——マニラの後も。とにかく、マニラへは予定通りに行くさ、ジャック。それは確かだと思っ」

実際のところ、わたしにはわからなかった。単に若者に意見を述べてただけで、その意見は当然、この奇妙な状況の中での可能性を根拠としただけだった。サーカス業はかなり危険なビジネスの一つ

だ。歴史上、途方もない野望や望みを抱いていた落伍者がいったいどれほどいたことか。大サーカスを率いたカービー・マーティンのこれまでの長い歴史は究極の博打ばくちであるとともに際立つた偉業だった。他の誰にできたであろう。ホノルルからカルカッタへと海をまわり、試行錯誤しながら出し物を決め、興奮と娯楽を生み出し、東洋の様々な国々の様々な人種の中で生き残っていくという事が？カービー・マーティンは生き残っただけではなく、サーカスは繁栄し評判となり、莫大な富をもたらしした。

しかし今、熱帯夜の闇が覆いはじめる頃、古びた（サーカス・クイーン号）は着実に穏やかな水面を進み、わたしは日没時にカービー・マーティンの亡骸を海に投じたという受け入れがたい事実についてひたすら考えていた。

マニラに着いたら、そして、マニラのあとにどうなるのか。今の時点では誰にもわからぬことだ。夜が更けた頃、団員の何人かが船長のキャビンに集まり、今後どうすべきかを検討した。やがて我々の見通しはまったく見当違いであることがわかった。所詮、人間の頭では翌日に何が起こるかなど知る由もないという事実を突きつけられた。もしもこの先、恐るべき出来事が待ち受けていると知ったなら、それは脅威となる。霧が立ち込める暗い岬のように、今はまだ嵐の海に脅かされることはないが、自分の直感など信じられるはずもない。

「最悪の場合、マニラでサーカスが解散することもある」机に向かって裁判官のようにウッズ船長が言った。「みんなが帰途につくだけの資金はあるはずだ。例えばサーカスが解散して、売却されることになっても」

「そんなことにはならないと思いますよ、船長」わたしは言った。「マニラで成功さえすれば。もち

ろん、カービー・マーティンが亡くなくてもショーは開かれます。ベン・カーソンがすべて手配して
いますから。昨夜、彼がジャワに発つ前にマニラからカービー宛てに無線電話がきました。宣伝、広
告看板、報道関係——すべて手配済みです。ある程度の売り上げがあれば——マニラの興行ではいつ
も儲けが出ています——例えサーカスを解散することになっても帰途につく充分な資金はあるでしょ
う。曲芸師の契約書にも謳われていることです——家路までの運賃を最優先させると。カービーがそ
のように約束していたはずですよ。もちろん」とわたしは続けて言った。「カービー・マーティンの私
生活についてはほとんど知りませんが。彼はわたしに親密な話など、ほとんどしませんでした。自分
が死んだあと、サーカスがどうなるかについて考えていたかどうかともわかりません——」

「若い女性がいるはずですよ。それから中国人も」ポール・ストラットンが厳かに言った。濃い眉の下
の黒い瞳が船長を見つめ、それからこちらの方を見た。

「若い女性？」わたしは繰り返した。

「はい、それから中国人も」

ポール・ストラットンは道化師の一人だった。彼は今、我々と一緒に船長のキャビンに座っていた。
なぜならカービー・マーティンはポールを気に入っていて誰よりも強い信頼を寄せていたと思われる
からだ。彼は昔から道化師をしているわけではなかった。大学の法科を卒業してシカゴで事務所を開
き、禁酒法時代に急成長を遂げた。なんらかの要因で好むと好まざるとにかかわらず、ある騒動の
代弁者となり、不運にも勝つべき裁判に負けてしまったのだ。その裁判には、とあるギャングの
命がかかっていたが、勝つべき裁判に負けてしまったために二度と事務所には戻らず、聞いた話では、
すぐに弁護士の仕事を手放して一夜のうちに片田舎に身を隠し、やがてサーカスに加わったそうだ。彼

は当時の事について決して話そうとしない。

ストラットンが体が大きく、おどおどとした感じの男で、椅子にだらしなく座り、足を引き摺るよ
うに歩くが、道化師の衣装を纏って顔に色を塗ると、まったく違った人間になる。滑稽さだけではな
く、極めて陽気な雰囲気を作りだし、見る限り不器用さは消え、足を引き摺ることもない。円形の舞
台で箱のまわりをぶらぶらと歩くと蓋が開き、張り子の骸骨が飛び出してくる。骸骨が彼を追いかけ、
彼は声を張り上げながら天幕から出てくる。その後、道化師のオーケストラに加わり、他の者によつ
て前に押し出され、バス・バイオリンでソロのパートを演奏するのだ。楽器に挑むようにまさしく名
人芸で渾身の演奏を行い、激しいクライマックスの一節でゴムの材質で巧妙に設計されたバイオリン
が膨らむと、大きな音を立てて破裂し、彼はピアノの方へ投げ出される。ピアノは完全に破壊される。
そして、その残骸の中から起き上がると埃をはらい、観客に向かって深くお辞儀をし、威厳をもつて
去ってゆくのだ。

「若い女性ってどういうことだ、ストラットン？」今まで議論に参加していなかったヴァンス・サー
ストンが訊いた。

「もちろん、あの娘だよ、彼の姪の」

「へえ——知らなかった」サーストンは言った。その声はこの情報に対する我々の驚きを代弁してい
た。

「彼女がカービーのたった一人の親戚さ」

船長は椅子に座って身じろぎし、足を組んだ。膝が机の縁のところからのぞいている。舌で唇を湿
らせ、ウイスキー・ソーダのグラスに手を伸ばしてそばに引き寄せた。

「ああ、思い出した」考え込みながら彼は言った。「女の子がいた。以前、サンボアンガで夜を過ごしたとき、カービー・マーティンから聞いたよ」

「その娘はサンボアンガに住んでるんですか？」ヴァンス・サーストンが尋ねた。さりげなく、あまり関心のなさそうな話しぶりだった。乗船している大勢の人間の中で、彼が一番わかりにくい人間だった。噂によると、カービー・マーティンが数年前、上海の海辺で彼を見つけたらしい。浮浪者のようなボロを纏っていたにもかかわらず、紳士的な雰囲気があり、さらにカービーは、なんらかの才能をそこに見出したのだという。生まれはオーストラリアだと聞いていたが、それ以上のことは知らなかった。やがてカービー・マーティンはサーカスの経営において彼を右腕とし、今や現行通り興行が継続されるなら、ヴァンス・サーストンがおおむねすべてを取り仕切ることになると思われた。

サーストンは三十代後半で、背がスラリと高くほっそりしている。太り過ぎでもなく、やせ過ぎでもなく、若いままの体型を維持していた。どんな彫刻家だつて、この完璧な額をかたどることはできないだろう。鼻と口は形も良く均衡がとれている。しかし目は冷たく、海辺で悲惨な年月を送ったあとで、いくらか人間味が残っているとしても、それは仮面ですっぽりと覆われていた。昔よくいた役者のような上品な服を纏い、首のまわりの黒く細いリボンの先には片眼鏡を吊り下げている。

「いや、サンボアンガじゃないな」道化師が甲高い声で、ためらいながら答えた。「カリフォルニアのどこか小さな町だと思う。ロスアンゼルス郊外の。ちよつと待てよ。どこかの田舎町。林檎の花とか緑の芝生とか乳しほりの女とか牝牛とかを連想するような——アルカディア（ロサンゼルス北東部の町）」だ！ そうだ、そこだよ。アルカディアさ」

「それじゃあ、その姪つてのがカービーの後継者つてことかい？」わたしは尋ねた。

〔著者〕

クリフォード・ナイト

1886年、アメリカ、カンザス州生まれ。ウォッシュバーン大学とミシガン大学に学び、エール大学での助教授職を経て、新聞社の編集補佐として勤務。出版社主催の長編ミステリ・コンテストで第一回受賞者となり、37年に“The Affair of the Scarlet Crab”で作家デビューを果たす。63年死去。

〔訳者〕

藤盛千夏（ふじもり・ちか）

小樽商科大学商学部卒。銀行勤務などを経て、インターカレッジ札幌にて翻訳を学ぶ。訳書に『殺意が芽生えるとき』、『リモート・コントロール』、『中国銅鑼の謎』、『夜間病棟』（いずれも論創社）。札幌市在住。

〈サーカス・クイーン号〉^{ごう} ^{じけん} 事件

——論創海外ミステリ 195

2017年9月20日 初版第1刷印刷

2017年9月30日 初版第1刷発行

著者 クリフォード・ナイト

訳者 藤盛千夏

装画 佐久間真人

装丁 宗利淳一

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1642-5

落丁・乱丁本はお取り替えいたします